杉浦・解析入門解答集

なまちゃん

2023年11月22日

目次		p63-64: 2-(iv)	18 19 19	$p247 : 1-(v) \dots p247 : 1-(viii) \dots p247 : 1-(xiii) \dots p247 : 1-(xiii) \dots p247 : 1-(xi) \dots p247 : $	32 33 33
目次	2	第2章:微分法	20	p247 : 1-(xi) p247 : 1-(xii)	34
第1章:実数と連続	2	p90-91:1-(i)	20	r · ()	
p2:問1	2	p90-91:1-(ii)	20	第5章:級数	34
p16-17:1-(i)	4	p90-91:1-(iii)	20	p366:1-(i)	34
p16-17: 1-(ii)	4	p90-91:9-(i)	21	p366:1-(ii)	34
p16-17: 1-(iii)	5	p90-91:10	22	p366: 1-(iii)	34
p16-17: 1-(iv)	5	p106-107:10	23		
p16-17:1-(v)	6	 第3章:初等函数	24		
p16-17:2)	6	p191-193:1	24 24		
p16-17:3)	6	p191-190 · 1 ·	24·		
p31-33:1-(i)	8	第4章:積分法	24		
p31-33:1-(ii)	8	p239:1-(i)	24		
p31-33:1-(iii)	9	p239:1-(ii)	25		
p31-33:1-(iv)	9	p239:1-(iii)	25		
p31-33:1-(v)	10	p239:1-(iv)	26		
p31-33:1-(vi)	10	p239:1-(v)	26		
p31-33:2	12	p239:1-(vi)	27		
p49-50:1	13	p239: 3-(i)	27		
$p49-50:2-(i) \dots \dots$	13	p239: 3-(ii)	28		
p49-50:2-(ii)	13	p239: 3-(iii)	28		
p49-50:2-(iii)	14	p239: 3-(iv)	28		
p49-50:2-(v)	14	p239: 3-(v)	28		
p49-50: 2-(viii)	14	p239: 3-(vii)	29		
p49-50:2-(x)	15	p239: 3-(vi)	29		
p49-50:3	15	p239: 3-(viii)	29		
p49-50:5	16	$p239 : 3-(ix) \dots$	30		
p49-50:6	16	p239-240: 4-(i)	30		
p63-64:1-(i)	17	p239-240:4-(i)	31		
p63-64:1-(iii)	17	p247:1-(i)	31		
p63-64:2-(i)	17	p247:1-(ii)	32		
p63-64:2-(iii)	18	p247:1-(iii)	32		

第1章:実数と連続

p2:問1

——— (1) ——

証明. $0,0' \in K$ がともに加法単位元の性質を満たすとする。 このとき、0 が加法単位元の性質をもつことから、

$$0' + 0 = 0'$$

同様に、0′が加法単位元の性質をもつことから、

$$0+0'=0$$

交換律より、0+0'=0'+0なので、

$$0' = 0' + 0 = 0 + 0' = 0$$

これからただちに加法単位元の一意性が従う. □

(2)

証明. $a, b \in K$ とし,

$$a+b=0$$

とする. このとき,

$$-a = -a + 0 = -a + (a + b) = (-a + a) + b = 0 + b = b$$

となり、加法逆元の一意性が従う。 □

— (3) **—**

証明. $a \in K$ のとき,

$$a + (-a) = 0$$

$$\therefore (-a) + a = 0$$

他方,-(-a)は(-a)の加法逆元であるから,

$$(-a) + (-(-a)) = 0$$

これと逆元の一意性により、a = -(-a) が従う. \square

(5) ———

証明. $a \in K$ に対して,

$$a + (-1)a = (1 + (-1))a = 0a = 0$$

であるから、-a が a の加法逆元であることと含めて主張が従う。 \square

(6)

証明. (4) の結果を用いる。a = -1 とすると、

$$(-1)(-1) = -(-1) = 1$$

これが証明すべきことであった. □

_____(7) ___

証明. $a, b \in K$ に対して,

$$a(-b) + ab = a((-b) + b)$$

$$= a0$$

$$= 0$$

$$\therefore a(-b) = -ab$$

(-a)b = -ab も同様にして示される.

p16-17:1-(i)

a=0 のときは明らかに 0 に収束するので、 $a\neq 0$ とする、 $2|a|\leq N$ となる $N\in\mathbb{N}$ をとる、このとき、

$$0 < \left| \frac{a^n}{n!} \right|$$

$$\leq \frac{|a|^n}{n!}$$

$$= \frac{|a|^N}{N!} \cdot \frac{|a|}{N+1} \cdot \frac{|a|}{N+2} \cdots \frac{|a|}{n}$$

$$\leq \frac{|a|^N}{N!} \left(\frac{1}{2}\right)^{n-N}$$

であるから,

$$-\frac{|a|^N}{N!} \left(\frac{1}{2}\right)^{n-N} \le \frac{a^n}{n!} \le \frac{|a|^N}{N!} \left(\frac{1}{2}\right)^{n-N}$$

となり、はさみうちの原理により、 $\lim_{n\to\infty}\frac{a^n}{n!}=0$

$$\lim_{n \to \infty} \frac{a^n}{n!} = 0$$

である

p16-17:1-(ii)

a=1 のときは明らかに 1 に収束するので、まず a>1 のときを考える。 $\delta_n>0$ を用いて、

$$\sqrt[n]{a} = 1 + \delta$$

$$a=1$$
 のときは明らかに 1 に収束するので、ます $\sqrt[n]{a}=1+\delta_n$ とおくことができる。両辺を n 乗すると
$$a=1+n\delta_n+\frac{1}{2}n(n-1)\delta_n^{\ 2}+\cdots+\delta_n^{\ 2}$$
 $>1+n\delta_n$ $>n\delta_n$ となり、 $0<\delta_n<\frac{a}{n}$ であるから、はさみうちの原

となり、 $0<\delta_n<rac{a}{n}$ であるから、はさみうちの原理により、

$$\lim_{n\to\infty}\delta_n=0$$

 $\lim_{n \to \infty} \delta_n = 0$ となる。a < 1 のときは, $a^{\frac{1}{n}} = \left(\left(\frac{1}{a}\right)^{\frac{1}{n}}\right)^{-1}$ を使えば同じ結果が得られ,以上の議論により,

$$\lim_{n \to \infty} \sqrt[n]{a} = 1$$

p16-17:1-(iii)

 $\frac{n}{2}$ 以下の最大の自然数を m とおく. 与えられた式は,

$$(0 <) \frac{n!}{n^n} = \frac{1 \cdot 2 \cdots m \cdot (m+1) \cdots n}{n^n}$$

 $(0<)\frac{n!}{n^n}=\frac{1\cdot 2\cdots m\cdot (m+1)\cdots n}{n^n}$ と表されるので、 $\frac{(m+1)\cdot (m+2)\cdots n}{n^{n-m}}<1$ であることと、 $m\leq \frac{n}{2}$ から $\frac{m}{n}\leq \frac{1}{2}$ であることを用いると、

$$\frac{1 \cdot 2 \cdots m \cdot (m+1) \cdots n}{n^n} < \frac{1 \cdot 2 \cdots m}{n^m} < \left(\frac{1}{2}\right)^m$$

$$0 < \frac{n!}{n^n} < \left(\frac{1}{2}\right)^n$$

よって, $0<\frac{n!}{n^n}<\left(\frac{1}{2}\right)^m$ である。 $n\to\infty$ のとき $m\to\infty$ なので,はさみうちの原理により, $\lim_{n\to\infty}\frac{n!}{n^n}=0$

$$\lim_{n \to \infty} \frac{n!}{n^n} = 0$$

p16-17:1-(iv)

のちに $n \to \infty$ の極限を考えることを考慮すると,

$$2^n=(1+1)^n$$

$$=1+n+\frac{1}{2}n(n-1)+\cdots+n+1$$
 $>\frac{1}{2}n(n-1)$ となり、この不等式から、
$$0<\frac{n}{2^n}<\frac{2}{n-1}$$
 を得る.ここで、はさみうちの原理により、
$$\lim_{n\to\infty}\frac{n}{2^n}=0$$

$$0 < \frac{n}{2^n} < \frac{2}{n-1}$$

$$\lim_{n \to \infty} \frac{n}{2^n} = 0$$

p16-17 : 1-(v)

の
$$<\sqrt{n+1}-\sqrt{n}=\frac{1}{\sqrt{n+1}+\sqrt{n}}$$
 である。ここで,のちに $n\to\infty$ の極限を考えることを考慮すると,
$$\frac{1}{\sqrt{n+1}+\sqrt{n}}<\frac{1}{\sqrt{n}}$$
 であり,
$$0<\sqrt{n+1}-\sqrt{n}<\frac{1}{\sqrt{n}}$$
 を得る。ここで,はさみうちの原理を用いると,
$$\lim_{n\to\infty}(\sqrt{n+1}-\sqrt{n})=0$$
 である

$$\frac{1}{\sqrt{n+1}+\sqrt{n}} < \frac{1}{\sqrt{n}}$$

$$0 < \sqrt{n+1} - \sqrt{n} < \frac{1}{\sqrt{n}}$$

$$\lim_{n \to \infty} (\sqrt{n+1} - \sqrt{n}) = 0$$

p16-17:2)

n = 1, 2, ... に対して,

$$f_n(x) = \lim_{m \to \infty} (\cos(n!\pi x))^{2m}$$

とおく、ここで、 $n!x \in \mathbb{Z}$ のとき、

$$\cos(n!\pi x) = \pm 1$$

 $n!x \notin \mathbb{Z}$ のときは,

$$\left|\cos(n!\pi x)\right| < 1$$

であるから,

$$f_n(x) = \begin{cases} 1 & (n!x \in \mathbb{Z}) \\ 0 & (n!x \notin \mathbb{Z}) \end{cases}$$

となる. さて、 $x\in\mathbb{R}\setminus\mathbb{Q}$ であるならば、どんな $n\in\mathbb{N}$ に対しても、n!x が整数とならない。また、 $x\in\mathbb{Q}$ の とき、 $x=\frac{p}{q}(p,\ q\in\mathbb{Z},\ q>0)$ とすれば、n が q より十分大きいときに n!x は整数となる. よって、

$$\lim_{n \to \infty} \left(\lim_{m \to \infty} (\cos(n!\pi x))^{2m} \right) = \begin{cases} 1 & (x \in \mathbb{Q}) \\ 0 & (x \in \mathbb{R} \setminus \mathbb{Q}) \end{cases}$$

p16-17:3)

《補題》

任意の $a_1, a_2, \dots a_n \in \mathbb{R}$ について,

$$|a_1 + a_2 + \dots + a_n| \le |a_1| + |a_2| + \dots + |a_n|$$

が成り立つ.

証明. n=2 のときは三角不等式そのものであるから, $n \ge 3$ とし,n-1 個の実数については補題の主張が成り立つものとする.

いま,

$$a_1 + a_2 + \dots + a_n = (a_1 + a_2 + \dots + a_{n-1}) + a_n$$

であるから, これに三角不等式を適用して,

$$|a_1 + a_2 + \dots + a_n| \le |a_1 + a_2 + \dots + a_{n-1}| + |a_n|$$

を得る。ここで、数学的帰納法の仮定より、

$$|a_1 + a_2 + \dots + a_{n-1}| \le |a_1| + |a_2| + \dots + |a_{n-1}|$$

がいえるので、ここまでの議論で、

$$|a_1 + a_2 + \dots + a_n| \le |a_1| + |a_2| + \dots + |a_n|$$

はnの場合にも成り立つことが示され、以上の議論より補題の主張が従う。 \square

証明. $\lim_{n\to\infty}a_n=a$ であるから,任意の $\varepsilon>0$ に対して,ある $N_1\in\mathbb{N}$ が存在して,任意の $n\in\mathbb{N}$ に対して,

$$n \ge N_1 \Longrightarrow |a_n - a| < \varepsilon$$

となる.

また,

$$\left| \frac{a_1 + a_2 + \dots + a_n}{n} - a \right| = \left| \frac{(a_1 - a) + (a_2 - a) + \dots + (a_n - a)}{n} \right|$$

と変形する. この右辺に補題を適用し,

$$\left| \frac{(a_1 - a) + (a_2 - a) + \dots + (a_n - a)}{n} \right| \le \frac{|a_1 - a| + |a_2 - a| + \dots + |a_n - a|}{n}$$

を得る. これにより,

$$n \ge N_1 \Longrightarrow \frac{|a_1 - a| + |a_2 - a| + \dots + |a_{n_1 - 1} - a|}{n} + \left(\frac{n - n_1 + 1}{n}\right)\varepsilon$$

となる.ここで $N_2\coloneqq N_1+1$ とすると, $n\geq N_2$ であるとき $\left(\frac{n-n_1+1}{n}\right)\varepsilon<\varepsilon$ となることに注意する. さて.

$$n \ge N_3 \Longrightarrow \frac{|a_1 - a| + |a_2 - a| + \dots + |a_{n_1 - 1} - a|}{n} < \varepsilon$$

となるように $N_3 \in \mathbb{N}$ をとる. $N := \max\{N_2, N_3\}$ とすると,

$$n \ge N \Longrightarrow \frac{|a_1 - a| + |a_2 - a| + \dots + |a_{n_1 - 1} - a|}{n} + \left(\frac{n - n_1 + 1}{n}\right)\varepsilon < \varepsilon + \varepsilon = 2\varepsilon$$

であり、これより

$$n \ge N \Longrightarrow \left| \frac{a_1 + a_2 + \dots + a_n}{n} - a \right| < 2\varepsilon$$

となる。書き換えると、

$$\lim_{n \to \infty} \frac{a_1 + a_2 + \dots + a_n}{n} = a$$

となり、これが証明すべきことであった。 □

p31-33:1-(i)

$$\frac{1^2 + 2^2 + \dots + n^2}{n^3} = \frac{\frac{1}{6}n(n+1)(2n+1)}{n^3}$$
$$= \frac{1}{6}\left(1 + \frac{1}{n}\right)\left(2 + \frac{1}{n}\right)$$

 $\frac{1^2+2^2+\cdots+n^2}{n^3}=\frac{\frac{1}{6}n(n+1)(2n+1)}{n^3}$ $=\frac{1}{6}\left(1+\frac{1}{n}\right)\left(2+\frac{1}{n}\right)$ $a_n=\frac{1}{6}\left(1+\frac{1}{n}\right),\ b_n=\left(2+\frac{1}{n}\right)$ とおくと、 $(a_n)_{n\in\mathbb{N}}$ は明らかに収束するから、定理 2.5(2) より、

$$\lim_{n \to \infty} a_n b_n = \lim_{n \to \infty} a_n \cdot \lim_{n \to \infty} b_n$$

 $\lim_{n\to\infty}a_nb_n=\lim_{n\to\infty}a_n\cdot\lim_{n\to\infty}b_n$ である。また、アルキメデスの原理により、 任意の $\varepsilon>0$ に対して、 $n_0\in\mathbb{N}$ を $n_0>\frac{1}{\varepsilon}$ となるようにとることができ、このとき、任意の $n\in\mathbb{N}$ に対して、

$$n \ge n_0 \Longrightarrow 0 < \frac{1}{n} \le \frac{1}{n_0} = \varepsilon$$

ことができ、このとき、任意の
$$n \in \mathbb{N}$$
 に対して、
$$n \ge n_0 \Longrightarrow 0 < \frac{1}{n} \le \frac{1}{n_0} = \varepsilon$$
 となり、
$$\lim_{n \to \infty} \frac{1}{n} = 0$$
 である。これより、
$$\lim_{n \to \infty} \frac{1^2 + 2^2 + \dots + n^2}{n^3} = \lim_{n \to \infty} \frac{1}{6} \left(1 + \frac{1}{n}\right) \left(2 + \frac{1}{n}\right)$$
$$= \left\{\lim_{n \to \infty} \frac{1}{6} \left(1 + \frac{1}{n}\right)\right\} \cdot \left\{\lim_{n \to \infty} \left(2 + \frac{1}{n}\right)\right\}$$
$$= \frac{1}{6} (1 + 0) \cdot (2 + 0) = \frac{1}{3}$$

p31-33:1-(ii)

正数列 $(a_n)_{n\in\mathbb{N}}$ に対して, $\left(\frac{a_{n+1}}{a_n}\right)_{n\in\mathbb{N}}$ が収束し,

$$\lim_{n \to \infty} \frac{a_{n+1}}{a_n} < 1$$

となるとき、 $\lim_{n\to\infty} a_n = 0$ である.

証明. $\lim_{n \to \infty} \frac{a_{n+1}}{a_n} < 1$ であるから, $r \ (0 < r < 1)$ に対して,ある $N_1 \in \mathbb{N}$ が存在して,任意の $n \in \mathbb{N}$ に対 して,

$$n \ge N_1 \Longrightarrow \frac{a_{n+1}}{a_n} < r$$

が成り立つ. このとき,

$$a_n = a_{N_1} \cdot \frac{a_{N_1+1}}{a_{N_1}} \cdot \frac{a_{N_1+2}}{a_{N_1+1}} \cdots \frac{a_{n-1}}{a_{n-2}} \frac{a_n}{a_{n-1}} < a_{N_1} r^{n-N_1} = \frac{a_{N_1}}{r^{N_1}} r^n$$

となる。0 < r < 1 より $\lim_{n \to \infty} \frac{a_{N_1}}{r^{N_1}} r^n = 0$ であるから, $\lim_{n \to \infty} a_n = 0$ である. \square

$$a_n=rac{n^2}{a^n}$$
 とおく、 $0< a \leq 1$ のときは明らかに $\lim_{n o\infty}a_n=\infty$ となる、 $a>1$ のとき, $rac{a_{n+1}}{a_n}=rac{\left(1+rac{1}{n}
ight)^2}{a}$ となり,

$$a>1$$
 のとぎ, $\frac{a_{n+1}}{a_n}=rac{\left(1+rac{1}{n}
ight)^2}{a}$ となり,

$$\lim_{n \to \infty} \frac{\left(1 + \frac{1}{n}\right)^2}{a} = \frac{1}{a} < 1$$

であるから、補題により、 $\lim_{n \to \infty} a_n = 0$ となる.以上の議論により、

$$\lim_{n \to \infty} \frac{n^2}{a^n} = \begin{cases} \infty & (0 < a \le 1) \\ 0 & (a > 1) \end{cases}$$

p31-33: 1-(iii)

明らかに $\sqrt[n]{n} > 1$ なので、 $\delta_n > 0$ を用いて、

$$\sqrt[n]{n} = 1 + \delta_n$$

とかける. 両辺をn乗して, $n \to \infty$ の極限を考えることを考慮すると,

$$n = (1 + \delta_n)^n = 1 + n\delta_n + \frac{1}{2}n(n-1)\delta_n^2 + \dots + (\delta_n)^n$$
$$> \frac{1}{2}n(n-1)\delta_n^2$$

$$0 < \delta_n < \sqrt{\frac{2}{n-1}}$$

となり、この不等式から、 $0<\delta_n<\sqrt{\frac{2}{n-1}}$ を得る。ここで、はさみうちの原理により、 $\lim_{n\to\infty}\delta_n=0$ であるから、 $\lim_{n\to\infty}\sqrt[n]{n}=1$

$$\lim_{n \to \infty} \sqrt[n]{n} = 1$$

である.

p31-33: 1-(iv)

$$a_n = n^k e^{-n}$$
 とおく. このとき,

$$\lim_{n \to \infty} \frac{a_{n+1}}{a_n} = \lim_{n \to \infty} \frac{\left(1 + \frac{1}{n}\right)^k}{e} = \frac{1}{e} < 1$$

$$\lim_{n \to \infty} n^k e^{-n} = 0$$

p31-33:1-(v)

$$a_n = \left(1 - \frac{1}{n^2}\right)^n$$
 とおく.
$$\lim_{n \to \infty} a_n = \lim_{n \to \infty} \left(1 - \frac{1}{n^2}\right)^n$$
$$= \lim_{n \to \infty} \left(1 + \frac{1}{n}\right)^n \left(1 - \frac{1}{n}\right)^n$$
$$= e \cdot \frac{1}{e} = 1$$

Cass

p31-33: 1-(vi)

《補題》

 $(a_n)_{n\in\mathbb{N}}$ を実数列とし, $a_n>0$ とする.もし $\lim_{n\to\infty}a_n=0$ であれば $\lim_{n\to\infty}rac{1}{a_n}=\infty$ である.また,もし $\lim_{n\to\infty}a_n=\infty$ であるならば, $\lim_{n\to\infty}rac{1}{a_n}=0$ である,

証明. 前半の主張のみ示せば後半の主張も同様に示せるので、前半のみ示す。与えられた条件により、任意の $\varepsilon>0$ に対して、 $n_0\in\mathbb{N}$ が存在して、任意の $n\in\mathbb{N}$ に対して、

$$n \ge n_0 \Longrightarrow |a_n - 0| < \varepsilon$$

が成り立つ、ここで $\frac{1}{\varepsilon}=M$ とおくと、上の $n_0\in\mathbb{N}$ に対して、

$$n \ge n_0 \Longrightarrow \frac{1}{a_n} > \frac{1}{\varepsilon} = M$$

となり、これより $\lim_{n\to\infty}\frac{1}{a_n}=\infty$ が示された. \square

《補題》

c > 1 のとき, $\lim_{n \to \infty} \frac{1}{c^n} = 0$ である.

証明. c>1 より, $\delta>0$ を用いて $c=1+\delta$ とおける.このとき,のちに $n\to\infty$ の極限を考えることを考慮すると,

$$c^{n} = (1+\delta)^{n}$$

$$= 1 + n\delta + \frac{1}{2}n(n-1)\delta^{2} + \dots + \delta^{n}$$

$$> 1 + n\delta$$

このことから, $0<\frac{1}{c^n}<\frac{1}{1+n\delta}$ であるから,はさみうちの原理により,

$$\lim_{n \to \infty} \frac{1}{c^n} = 0 \ (c > 1)$$

である. □

 $a_n=(c^n+c^{-n})^{-1}$ とおく、c=1 のときは明らかに $\lim_{n\to\infty}a_n=rac{1}{2}$ である、c>1 のとき、2 つの補題により、

$$\lim_{n \to \infty} (c^n + c^{-n}) = \infty$$

 $\lim_{n\to\infty}(c^n+c^{-n})=\infty$ であるから、補題により $\lim_{n\to\infty}a_n=\lim_{n\to\infty}(c^n+c^{-n})^{-1}=0$ である。 0< c<1 のときは c の逆数を考えることにより同じ結論に帰着する.以上の議論により、

$$\lim_{n \to \infty} (c^n + c^{-n})^{-1} = \begin{cases} \frac{1}{2} & (c = 1) \\ 0 & (c \neq 1) \end{cases}$$

p31-33:2

証明. 二項定理を用いて $(a_n)_{n\in\mathbb{N}}$ の一般項を展開すると,

$$a_n = 1 + n \cdot \frac{1}{n} + \frac{n(n-1)}{2!} \cdot \frac{1}{n^2} + \dots + \frac{n(n-1)\cdots(n-r+1)}{r!} \cdot \frac{1}{n^r} + \dots + \frac{n!}{n!} \cdot + \frac{1}{n^n}$$

$$= 1 + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!} \left(1 - \frac{1}{n} \right) + \dots + \frac{1}{r!} \cdot \left(1 - \frac{1}{n} \right) \dots \left(1 - \frac{r-1}{n} \right) + \dots + \frac{1}{n!} \left(1 - \frac{1}{n} \right) \dots \left(1 - \frac{n-1}{n} \right)$$

同様にして, a_{n+1} の展開式を得たとき, $\frac{1}{n+1}<\frac{1}{n}$ であることにより, $r\in\{1,2,\ldots,n\}$ に対して,

$$\frac{1}{r!} \cdot \left(1 - \frac{1}{n}\right) \dots \left(1 - \frac{r-1}{n}\right) < \frac{1}{r!} \cdot \left(1 - \frac{1}{n+1}\right) \dots \left(1 - \frac{r-1}{n+1}\right)$$

が成立する。これと、 a_{n+1} の展開式のほうが、正の項を一つ多く含むことから、任意の $n\in\mathbb{N}$ に対して、

$$a_n < a_{n+1}$$

が成立し、 $(a_n)_{n\in\mathbb{N}}$ は単調増加数列である。また、

$$a_n < 1 + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!} + \frac{1}{3!} + \dots + \frac{1}{n!}$$

$$< 1 + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2} + \frac{1}{2^2} + \dots + \frac{1}{2^n}$$

$$< 2 + \frac{1}{2} \left(\frac{1 - 2^{-n}}{1 - \frac{1}{2}} \right)$$

$$= 3 - 2^{-n}$$

$$< 3$$

であるから、 $a_n < 3$ となる.

また、 $(a_n)_{n\in\mathbb{N}}$ が単調増加数列であることから、任意の $n\in\mathbb{N}\setminus\{0,1\}$ に対して、

$$a_n > a_1 = \left(1 + \frac{1}{1}\right)^1 = 2$$

$$\lim_{n \to \infty} a_n \le \epsilon$$

である. 他方,

$$\lim_{n \to \infty} a_n \ge a_n > 1 + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!} + \dots + \frac{1}{r!}$$

であるから、ここで $r o \infty$ として、 $\lim_{n o \infty} a_n \geq e$

$$\lim_{n \to \infty} a_n \ge e$$

となり、
$$\lim_{n\to\infty} a_n = e$$
 を得る. \square

p49-50:1

証明. $\lim_{n \to \infty} \sqrt[r]{a_n} = r$ であるから、0 < r < 1 のとき、r < k < 1 に対して、ある $n_1 \in \mathbb{N}$ が存在して、任意の $n \in \mathbb{N}$ に対して、

$$n \ge n_1 \Longrightarrow a_n < k^n$$

となる.ここで,定理 5.5(比較判定法)と $\lim_{n\to\infty}k^n=0$ より, $\sum a_n$ は収束する. r>1 のとき,1>0 に対して,ある $n_2\in\mathbb{N}$ が存在して,任意の $n\in\mathbb{N}$ に対して,

$$n > n_2 \Longrightarrow a_n > 1$$

が成り立ち, $\lim_{n \to \infty} a_n \neq 0$ となる.よって定理 5.1 系の対偶により $\sum a_n$ は発散する. \Box

p49-50: 2-(i)

$$\frac{2n^2}{n^3+1} = \frac{2/3}{n+1} + \frac{4n/3 - 2/3}{n^2 - n + 1}$$

により

$$\sum \frac{2n^2}{n^3+1} = \sum \frac{2/3}{n+1} + \sum \frac{4n/3 - 2/3}{n^2 - n + 1}$$
$$> \sum \frac{2/3}{n+1} \to \infty$$

となる。よってこの級数は発散する

p49-50: 2-(ii)

$$\sum_{n=1}^{\infty} \frac{\sqrt{n}}{1+n^2} < \sum \frac{\sqrt{n}}{n^2} = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{1}{n^{3/2}} \ \left(< 1 + \int_{1}^{\infty} \frac{dx}{x^{3/2}} = 3 \right)$$

であるから、この級数は収束する。また

$$\sum \frac{1}{n^{\alpha}}$$

が $\alpha > 1$ のときに収束することを用いることもできる.

p49-50: 2-(iii)

a=1 のとき,この級数は明らかに収束する. $a \neq 1$ のとき, a^x の x=0 のまわりでの Taylor 展開

$$a^{x} = 1 + (\log a)x + \frac{(\log a)^{2}}{2!}x^{2} + O(x^{3})$$

を用いて

$$\sum (a^{1/n} - 1) = \sum \left\{ \frac{\log a}{n} + \frac{(\log a)^2}{2!n^2} + O\left(\frac{1}{n^3}\right) \right\}$$
$$> \sum \frac{\log a}{n} \to \infty$$

となる. よってこの級数は a=1 のときは収束し, $a \neq 1$ のときは発散する.

p49-50:2-(v)

定理 5.7 (ダランベールの収束判定) を用いる。 $a_n = n/2^n$ とおくと

$$\lim_{n \to \infty} \frac{a_{n+1}}{a_n} = \lim_{n \to \infty} \frac{n+1}{n} \frac{2^n}{2^{n+1}} = \frac{1}{2} < 1$$

となることにより, この級数は収束する

p49-50: 2-(viii)

$$\frac{(1+n)^n}{n^{n+1}} > \frac{n^n}{n^{n+1}} = \frac{1}{n}$$

であることから

$$\sum \frac{(1+n)^n}{n^{n+1}} > \sum \frac{1}{n} \to \infty$$

となる. よってこの級数は発散する.

p49-50 : 2-(x)

定理 5.7(ダランベールの収束判定)より
$$a_n = \left(\frac{n}{n+1}\right)^{n^2}$$
 とすると

$$\frac{a_{n+1}}{a_n} = \frac{(n+1)^{(n+1)^2}}{(n+2)^{(n+1)^2}} \frac{(n+1)^{n^2}}{n^{n^2}} = \frac{(n+1)^{n^2}}{n^{n^2}} \frac{(n+1)^{n^2}}{(n+2)^{n^2}} \frac{(n+1)^{2n+1}}{(n+2)^{2n+1}}$$
$$= \left(1 + \frac{1}{n}\right)^{n^2} \left(1 - \frac{1}{n+2}\right)^{n^2} \left(1 - \frac{1}{n+2}\right)^{2n+1}$$

ここで

$$\left(1 + \frac{1}{n}\right)^{n^2} \left(1 - \frac{1}{n+2}\right)^{n^2} = \left(1 + \frac{1}{n(n+2)}\right)^{n^2} = \left(1 + \frac{1}{n(n+2)}\right)^{n(n+2)} \left(1 + \frac{1}{n(n+2)}\right)^{-2n}$$

とすることにより、右辺は $e \times 1 = e$ に収束する.

$$\left(1 - \frac{1}{n+2}\right)^{2n+1} = \left\{ \left(1 - \frac{1}{n+2}\right)^{-(n+2)} \right\}^{-2} \left(1 - \frac{1}{n+2}\right)^{-3}$$

とすることで、右辺は $\frac{1}{e^2} \times 1 = \frac{1}{e}$ に収束する. よって

$$\frac{a_{n+1}}{a_n} = e \times \frac{1}{e^2} = \frac{1}{e} < 1$$

となる. ゆえにこの級数は収束する.

p49-50:3

証明. $\sum a_n$ が絶対収束するので、 $\sum |a_n|$ も収束する。よって、定理 5.1 系より、 $\lim_{n\to\infty}|a_n|=0$ となる。このとき、1>0 に対して、ある $n_1\in\mathbb{N}$ が存在して、任意の $n\in\mathbb{N}$ に対して、

$$n \geq n_1 \Longrightarrow ||a_n| - 0| < 1$$

が成り立つ また、 $|a_m| < 1$ のとき、

$$0 \le \left| a_n^2 \right| \le \left| a_n \right|^2 \le \left| a_n \right|$$

が成り立つ。ここで, $\sum |a_n|$ が収束し,各項は正なので, 定理 5.5(比較判定法) により, $\sum \left|a_n^2\right|$ も収束する.ゆえに $\sum a_n^2$ は絶対収束する. \Box

p49-50:5

証明. 与えられた条件により, $0 < r < c, r
eq \infty$ をみたす $r \in \mathbb{R}$ に対して,ある $N \in \mathbb{N}$ が存在して,任意

$$n \ge N \Longrightarrow \left| \frac{a_n}{b_n} - c \right| < r$$

$$0 < -r + c < \frac{a_n}{b_n} < r + c$$

$$\therefore (-r + c)b_n < a_n < (r + c)b_n$$

が成り立つ。これにより, $0<-r+c<\frac{a_n}{b_n}< r+c$ $\therefore \ (-r+c)b_n< a_n< (r+c)b_n$ となる。これと比較原理により, $\sum a_n$ と $\sum b_n$ は同時に収束,発散することが証明された. \square

p49-50:6

$$\lim_{n o \infty} rac{1}{2n+1} = 0$$
 により, $\sum_{n=0}^{\infty} rac{(-1)^n}{2n+1}$ は収束する.ここで,

$$1 - x^{2} + x^{4} - \dots + (-1)^{n} x^{2n} = \frac{1}{1 + x^{2}} + \frac{(-1)^{n} x^{2n+2}}{x^{2} + 1}$$

$$\overbrace{1 - \frac{1}{3} + \frac{1}{5} - \dots + \frac{(-1)^n}{2n+1}}^{s_n} = \int_0^1 \frac{1}{1+x^2} dx + \int_0^1 \frac{(-1)^n x^{2n+2}}{x^2+1} dx \\
= \frac{\pi}{4} + R_n$$
である。ただしここで $R_n = \int_0^1 \frac{(-1)^n x^{2n+2}}{x^2+1} dx$ とおいた。この式から、

$$\left| s_n - \frac{\pi}{4} \right| = \left| \int_0^1 \frac{(-1)^n x^{2n+2}}{x^2 + 1} \, dx \right|$$

$$< \int_0^1 x^{2n} \, dx$$

$$= \frac{1}{2n+1} \to 0 \ (n \to \infty)$$
である。よって、
$$\sum_{n=0}^\infty \frac{(-1)^n}{2n+1} = \frac{\pi}{4}$$

$$\sum_{n=0}^{\infty} \frac{(-1)^n}{2n+1} = \frac{\pi}{4}$$

p63-64:1-(i)

$$f(a)$$
 を考えるため, $a \neq 0$ としてよい. $\delta \leq \frac{|a|}{2}$ とすると, $|x-a| < \delta$ より

$$|x| > |a| - \delta \ge \frac{|a|}{2}$$

$$|x|>|a|-\delta\geq rac{|a|}{2}$$
 である.これに留意すると,
$$\left|rac{1}{x}-rac{1}{a}
ight|=rac{|a-x|}{|ax|}<rac{2\delta}{|a|^2}$$

p63-64: 1-(iii)

 $t \coloneqq \min\{x, a\}$ とする. このとき, 指数法則により,

$$|e^x - e^a| = e^t(e^{|x-a|} - 1)$$

が成立する.また, $t \leq a$ であるから,

$$e^t \le e^a$$

$$e^t \le e^a$$

$$\therefore e^t(e^{|x-a|} - 1) \le e^a(e^{|x-a|} - 1)$$

$$\forall \zeta,$$

$$\varepsilon = e^a(e^{\delta} - 1)$$

$$\delta = \log(1 + e^{-a}\varepsilon)$$

p63-64: 2-(i)

$$\left|\sin\frac{1}{x}\right| \le 1, \ \left|\sin\frac{1}{y}\right| \le 1$$
 であるから

$$\left|\sin\frac{1}{x}\right| \le 1, \ \left|\sin\frac{1}{y}\right| \le 1 \ \text{であるから},$$

$$\left|(x+y)\sin\frac{1}{x}\sin\frac{1}{y}\right| \le |(x+y)| \le |x|+|y| \to 0 \quad \left((x,y)\to 0\right)$$
 である. よって,
$$\lim_{(x,y)\to 0} (x+y)\sin\frac{1}{x}\sin\frac{1}{y} = 0$$

$$\lim_{(x,y)\to 0} (x+y)\sin\frac{1}{x}\sin\frac{1}{y} = 0$$

p63-64: 2-(iii)

まず、 $\log x^x = x \log x$ である。また、

$$\lim_{x\to +0} x\log x = \lim_{x\to +0} \frac{\log x}{1/x}$$

となる. ここで, $\lim_{x\to+0}\log x=-\infty$, $\lim_{x\to+0}1/x=\infty$ であるから,ロピタルの定理が適用でき,

$$\lim_{x \to +0} \frac{\log x}{1/x} = \lim_{x \to +0} \frac{1/x}{-1/x^2}$$
$$= \lim_{x \to +0} (-x)$$
$$= 0$$

である よって.

$$\lim_{x \to +0} x^x = \lim_{x \to +0} e^{\log x^x}$$
$$= e^0 = 1$$

となり、これが答である.

p63-64: 2-(iv)

 $x = r\cos\theta$, $y = r\sin\theta$ とおくと,

$$\begin{split} \lim_{(x,y)\to 0} \frac{1-\cos\left(x^2+y^2\right)}{x^2+y^2} &= \lim_{r\to 0} \frac{1-\cos\left(r^2\right)}{r^2} \\ &= \lim_{r\to 0} \frac{1-\left(-2\sin^2(r^2/2)+1\right)}{r^2} \\ &= \lim_{r\to 0} \frac{\sin^2(r^2/2)}{(r^2/2)^2} \cdot (r^2/2) \\ &= 1^2 \cdot 0 = 0 \end{split}$$

を得て、これが答えである.

p63-64: 3-(i)

以下, \mathbb{Q} の閉包は \mathbb{R} であることを示す. $a \in \mathbb{R}$ に対して,

$$U(a,\varepsilon)\cap\mathbb{Q}\neq\emptyset$$

すなわち

$$(a-\varepsilon,a+\varepsilon)\cap \mathbb{Q}\neq\emptyset$$

となればよい. アルキメデスの原理により、任意の $\varepsilon > 0$ に対して、

$$\frac{1}{n} < 2\varepsilon$$

となる $n \in \mathbb{N} \setminus \{0\}$ が存在する。また、n を分母とする有理数は数直線上に幅 $\frac{1}{n}$ で並んでいるから、

$$\frac{m}{n} \in (a - \varepsilon, a + \varepsilon)$$

となる $m \in \mathbb{N} \setminus \{0\}$ が存在する.

したがって $a \in \mathbb{R}$ と任意の $\varepsilon > 0$ に対して $(a - \varepsilon, a + \varepsilon) \cap \mathbb{Q} \neq \emptyset$ となるため,

$$\overline{\mathbb{O}} = \mathbb{R}$$

である.

p63-64:4-(i)

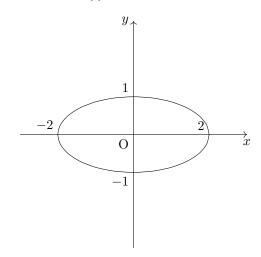
証明. d(x) = 0 は $\inf_{y \in A} |x - y| = 0$ ともかける.

$$\inf_{y \in A} |x - y| = 0 \iff (\forall \varepsilon > 0) \ (\exists y \in A) \ (|x - y| < \varepsilon)$$
$$\iff x \in \overline{A}$$

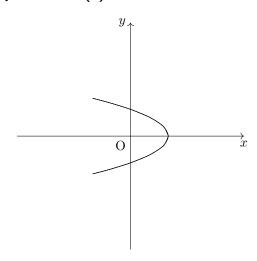
これにより示された. 口

第2章:微分法

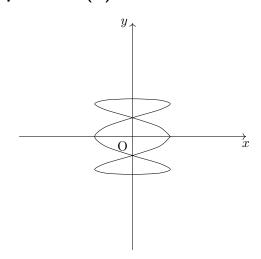
p90-91:1-(i)



p90-91:1-(ii)



p90-91:1-(iii)



p90-91:9-(i)

$$(\log x)^{(1)} = 1/x$$
, $(\log x)^{(2)} = -1/x^2$, $(\log x)^{(3)} = 2/x^3$, $(\log x)^{(4)} = -6/x^4$

であるから,

$$(\log x)^{(n)} = \frac{(-1)^{n-1}(n-1)!}{x^n}$$

と推測できる. この推測が正しいことを数学的帰納法により証明する.

(1)
$$n = 1$$
 のとき, $(\log x)^{(1)} = 1/x$ であり,

$$\frac{(-1)^{1-1}(1-1)!}{x^1} = 1/x$$

であるから、この場合に推測は正しい.

(2) n = k のときに、この推測が正しいと仮定すると、

$$(\log x)^{(k)} = \frac{(-1)^{k-1}(k-1)!}{x^k}$$

である. ここで.

$$(\log x)^{(k+1)} = \left(\frac{(-1)^{k-1}(k-1)!}{x^k}\right)'$$
$$= \frac{(-1)^k k!}{x^{k+1}}$$

であるから、n = k + 1 のときも推測は正しい.

 $(1).(2) \downarrow b$

$$(\log x)^{(n)} = \frac{(-1)^{n-1}(n-1)!}{x^n}$$

である

.
$$\left(\frac{1}{x^2 + 3x + 2}\right)^{(n)} = (-1)^n n! \{(x+1)^{-n-1} - (x+2)^{-n-1}\}$$

p90-91:10

証明.
$$u(x) = (x^2 - 1)^n$$
 とおく, このとき,

$$U'(x) = 2xn(x^2 - 1)^{n-1}$$

$$(x^2 - 1)u'(x) = 2nx \cdot u(x)$$

 $U'(x)=2xn(x^2-1)^{n-1}$ だから, $(x^2-1)u'(x)=2nx\cdot u(x)$ この両辺を (n+1) 回微分して,

この両辺を
$$(n+1)$$
 回微分して、
$$(x^2-1)u^{(n+2)}(x)+2(n+1)xu^{(n+1)}x+\frac{(n+1)n}{2}\cdot u^{(n)}(x)=2nxu^{(n+1)}(x)+2(n+1)nu^{(n)}(x)$$
 ∴ $(x^2-1)u^{(n+2)}(x)+2nu^{(n+1)}(x)-(n+1)nu^{(n)}(x)=0$ ここで、 $u^{(n)}(x)=2^nn!P_n(x)$ なので、
$$(x^2-1)\{2^nn!P_n''(x)\}+2x\{2^nn!P_n(x)\}-n(n+1)\{2^nnP_n(x)\}=0$$
 ∴ $(x^2-1)P_n''(x)+2xP_n'(x)-n(n+1)P_n(x)=0$

ここで、
$$u^{(n)}(x) = 2^n n! P_n(x)$$
 なので

$$(x^{2}-1)\{2^{n}n!P_{n}''(x)\} + 2x\{2^{n}n!P_{n}(x)\} - n(n+1)\{2^{n}nP_{n}(x)\} = 0$$

$$\therefore (x^2 - 1)P_n''(x) + 2xP_n'(x) - n(n+1)P_n(x) = 0$$

p106-107:10

証明. 3つのことを証明する.

a) と b) が同値であること

 $a < x \le y$ または $y \le x < a$ に対して、 $0 \le t < 1$ を用いて、

$$x = ta + (1 - t)y$$

とおく. $a < x \le y$ とする. このとき,

$$t = \frac{x - y}{a - y} \tag{1}$$

と表せることはよい.

また, f は I で凸であり, これは

$$f(x) = tf(x) + (1-t)f(x) < tf(a) + (1-t)f(y)$$
(2)

と同値である. x < y のとき (2) に (1) の t の値を代入すれば,

$$\frac{f(x) - f(a)}{x - a} < \frac{f(y) - f(x)}{y - x} \tag{3}$$

を得る. x = y のときは明らか.

a) と c) が同値であること

c) を仮定する。(3) の左辺について、平均値の定理により、

$$\frac{f(x) - f(a)}{x - a} = f'(\xi)$$

をみたす ξ ($a < \xi < x$) が存在する. 同様に, (3) の右辺について, 平均値の定理により,

$$\frac{f(y) - f(x)}{y - x} = f'(\eta)$$

をみたす η $(x < \eta < y)$ が存在する. 仮定により, $f'(\xi) \le f'(\eta)$ だから, (3) が成り立ち, (3) が成り立ち, (3) が成り立ち, (3) が

a), すなわち (3) を仮定する. 左辺について, $x \to +a$ とすれば, これは f'(a) に収束し, 右辺は, これは (f(y)-f(a))/(y-a) に収束する (これを α とおく.). $f'(a) \le \alpha$ となることはよい. また, $x \to -y$ とすれば, 左辺は α に, 右辺は f'(y) に収束する. $\alpha \le f'(y)$ となることもよい. よって, a) と c) は同値である.

a) と d) が同値であること

d) を仮定する.これは f'(x) は I 上で単調増加であることと同値である.

以上の議論により、示された。 □

第3章:初等函数

p191-193:1

証明. $m, n \in \mathbb{N}, n > 0$ とし, $e = \frac{m}{n}$ と表される,すなわち e が有理数だと仮定する.このとき,与えられたずなが以

$$\frac{e^{\theta}}{(n+1)!} = e - \sum_{k=0}^{n} \frac{1}{k!} = \frac{m}{n} - \sum_{k=0}^{n} \frac{1}{k!}$$

$$\frac{e^{\theta}}{n+1} = m \cdot n! - \sum_{k=0}^{n} \frac{n!}{k!}$$

$$1 \le \frac{e^{\theta}}{n+1} < \frac{3}{n+1}$$

であり、 $\frac{e^{\theta}}{(n+1)!} = e - \sum_{k=0}^{n} \frac{1}{k!} = \frac{m}{n} - \sum_{k=0}^{n} \frac{1}{k!}$ とする。これにより。 $\frac{e^{\theta}}{n+1} = m \cdot n! - \sum_{k=0}^{n} \frac{n!}{k!}$ であり、 $m \cdot n! - \sum_{k=0}^{n} \frac{n!}{k!} \in \mathbb{Z}$ であるから、 $\frac{e^{\theta}}{n+1} \in \mathbb{Z}$ である。よって、 $0 < \theta < 1$ 、2 < e < 3 とあわせて、 $1 \leq \frac{e^{\theta}}{n+1} < \frac{3}{n+1}$ であり、 $\frac{e^{\theta}}{n+1} \in \mathbb{Z}$ であるから n=1 となる。ゆえに e=m となり、e は整数である。しかし 2 < e < 3 であるから、これは矛盾である。よって先の仮定が誤りであり、e は無理数である。

第4章:積分法

p239: 1-(i)

$$\tan\frac{x}{2} = t$$
 とおくと,

$$\int_0^{\frac{\pi}{2}} \frac{\sin x}{1 + \cos x} dx = \int_0^1 \frac{\frac{2t}{1 + t^2}}{1 + \frac{1 - t^2}{1 + t^2}} \cdot \frac{2}{1 + t^2} dt$$
$$= \int_0^1 \frac{2t}{1 + t^2} dt$$
$$= \left[\log(t^2 + 1) \right]_0^1$$
$$= \log 2 - 0 = \log 2$$

p239: 1-(ii)

$$x-a=a\sin\theta\;(-\pi\leq\theta<\pi)$$
 とする置換を用いる。
$$\int_0^a \sqrt{2ax-x^2}\,dx = \int_0^a \sqrt{-(x-a)^2+a^2}\,dx$$

$$= \int_{-\frac{\pi}{2}}^0 a\sqrt{1-\sin^2\theta}\cdot a\cos\theta\,d\theta$$

$$= \int_{-\frac{\pi}{2}}^0 a|\cos\theta|\cdot a\cos\theta\,d\theta$$

$$= \int_{-\frac{\pi}{2}}^0 a^2\cos^2\theta\,d\theta$$

$$= \int_{-\frac{\pi}{2}}^0 a^2\left(\frac{1+\cos2\theta}{2}\right)\,d\theta$$

$$= \frac{1}{2}a^2\left[\theta+\frac{1}{2}\sin2\theta\right]_{-\frac{\pi}{2}}^0$$

$$= \frac{\pi a^2}{4}$$

p239: 1-(iii)

$$|\sin 2\theta| = \begin{cases} \sin 2\theta & (0 \le \theta < \frac{\pi}{2} \mathcal{O} \ \xi \ \tilde{\mathcal{E}}) \\ -\sin 2\theta & (\frac{\pi}{2} \le \theta \le \pi \mathcal{O} \ \xi \ \tilde{\mathcal{E}}) \end{cases}$$

なので,

$$\int_0^{\pi} |\sin 2\theta| \, d\theta = \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin 2\theta \, d\theta + \int_{\frac{\pi}{2}}^{\pi} (-\sin 2\theta) \, d\theta$$
$$= \left[-\frac{\cos 2\theta}{2} \right]_0^{\frac{\pi}{2}} + \left[\frac{\cos 2\theta}{2} \right]_{\frac{\pi}{2}}^{\pi}$$
$$= -\frac{(-1-1)}{2} + \frac{1+1}{2} = 2$$

p239: 1-(iv)

$$\int_0^{\pi} e^{inx} dx = \begin{cases} 2\pi & (n = 0 \text{ のとき}) \\ 0 & (n \in \mathbb{Z} \setminus \{0\} \text{ のとき}) \end{cases}$$

である. n=0のときは

$$\int_0^{2\pi} e^{inx} dx = \int_0^{2\pi} dx$$
$$= \left[x \right]_0^{2\pi} = 2\pi$$

 $2xy, n \neq 0$ のときは

$$\int_0^{2\pi} e^{inx} dx = \left[\frac{e^{inx}}{in} \right]_0^{2\pi}$$
$$= \frac{1}{in} (1 - 1) = 0$$

となる.

p239:1-(v)

m=n のとき,

$$\int_0^{2\pi} \cos mx \sin nx \, dx = \int_0^{2\pi} \cos mx \sin mx \, dx$$
$$= \int_0^{2\pi} \left(\frac{\sin 2mx + \sin 0}{2} \right) \, dx$$
$$= \left[-\frac{\cos 2mx}{2m} \right]_0^{2\pi} = 0$$

となる. $m \neq n$ のとき,

$$\int_0^{2\pi} \cos mx \sin nx \, dx = \int_0^{2\pi} \left(\frac{\sin((m+n)x) + \sin((n-m)x)}{2} \right) \, dx$$
$$= \frac{1}{2} \left[\frac{\sin((m+n)x)}{m+n} + \frac{\sin((n-m)x)}{n-m} \right]_0^{2\pi} = 0$$

である, ここまでの議論と, m と n の対称性により,

$$\int_0^{2\pi} \cos mx \sin nx \, dx = \int_0^{2\pi} \sin mx \cos nx \, dx = 0 \ (n, m \in \mathbb{N})$$

となる.

p239: 1-(vi)

 $m \neq n$ のとき,

$$\int_0^{2\pi} \cos mx \cos nx \, dx = \int_0^{2\pi} \left(\frac{\cos((m+n)x) + \cos((n-m)x)}{2} \right) \, dx$$
$$= \frac{1}{2} \left[\frac{\sin((m+n)x)}{m+n} + \frac{\sin((n-m)x)}{n-m} \right]_0^{2\pi}$$
$$= 0 - 0 = 0$$

となる. $m = n \neq 0$ のとき,

$$\int_0^{2\pi} \cos mx \cos nx \, dx = \int_0^{2\pi} \cos^2 mx \, dx$$
$$= \int_0^{2\pi} \left(\frac{1 + \cos 2mx}{2} \right) \, dx$$
$$= \left[\frac{x}{2} + \frac{\sin 2mx}{4m} \right]_0^{2\pi} = \pi$$

となる. m=n=0のとき,

$$\int_0^{2\pi} \cos mx \cos nx \, dx = \int_0^{2\pi} dx$$
$$= [x]_0^{2\pi} = 2\pi$$

となる、以上をまとめて、

$$\int_0^{2\pi} \cos mx \cos nx \, dx = \begin{cases} 0 & (m \neq n \text{ odd}) \\ \pi & (m = n \neq 0 \text{ odd}) \\ 2\pi & (m = n = 0 \text{ odd}) \end{cases}$$

である.

p239: 3-(i)

部分積分法を用いると,

$$\int x^{\alpha} \log x \, dx = \frac{x^{\alpha+1} \log x}{\alpha+1} - \int \frac{x^{\alpha+1}}{\alpha+1} \cdot \frac{1}{x} \, dx$$
$$= \frac{x^{\alpha+1} \log x}{\alpha+1} - \frac{1}{\alpha+1} \int x^{\alpha} \, dx$$
$$= \frac{x^{\alpha+1} \log x}{\alpha+1} - \frac{x^{\alpha+1}}{(\alpha+1)^2} + C$$

となり、これが答えである.

p239: 3-(ii)

部分積分法を用いると,

$$\int x^n e^x \, dx = x^n e^x - n \int x^{n-1} e^x \, dx$$

$$= x^n e^x - nx^{n-1} e^x + (n-1) \int x^{n-2} e^x \, dx$$

$$= \dots = x^n e^x - nx^{n-1} e^x + \dots + (-1)^n n! \int e^x \, dx$$

$$= e^x (x^n - nx^{n-1} + \dots + (-1)^n n!) + C$$

となる.

p239: 3-(iii)

部分積分法を用いると,

$$\int (\log x)^n \, dx = \int (\log x)^n (x)' \, dx$$

$$= x(\log x)^n - n \int \frac{(\log x)^{n-1}}{x} \cdot x \, dx$$

$$= x(\log x)^n - nx(\log x)^{n-1} + (n-1) \int \frac{(\log x)^{n-2}}{x} \cdot x \, dx$$

$$= \dots = x(\log x)^n - nx(\log x)^{n-1} + \dots + x(-1)^n n! + C$$

となり、これが答えである.

p239: 3-(iv)

部分積分法を用いると,

$$\int \arcsin x \, dx = \int (x)' \arcsin x \, dx$$

$$= x \arcsin x - \int \frac{x}{\sqrt{1 - x^2}} \, dx$$

$$= x \arcsin x + \sqrt{1 - x^2} + C$$

であり、これが答えである.

p239: 3-(v)

$$\cos^2 x = \frac{1 + \cos 2x}{2} \text{ is own},$$

$$\int \cos^2 x \, dx = \int \frac{1 + \cos 2x}{2} \, dx$$

$$= \frac{x}{2} + \frac{1}{4} \sin 2x + C$$

である.

p239: 3-(vii)

$$x+1=t$$
 とおくと、 $dt=dx$ であり、
$$\int \frac{x^2+2}{(x+1)^3} dx = \int \frac{(t-1)^2+2}{t^3} dt$$

$$= \int \left(\frac{1}{t} - \frac{2}{t^2} + \frac{3}{t^3}\right) dt$$

$$= \log|x+1| + \frac{2}{x+1} - \frac{3}{2(x+1)^2} + C$$

となり、これが答えである。

p239: 3-(vi)

$$(\log x)' = \frac{1}{x}$$
 であることを用いて,
$$\int \frac{(\log x)^2}{x} dx = \int (\log x)^2 (\log x)' dx$$

$$= \frac{(\log x)^3}{3} + C$$

となり、これが答えである。

p239: 3-(viii)

$$\cos^2 x = 1 - \sin^2 x \, \text{$\not = 0$} \, \text{$\not = 0$},$$

$$\int \sin^3 x \cos^2 x \, dx = \int \sin^3 x (1 - \sin^2 x) \, dx = \int (\sin^3 x - \sin^5 x) \, dx$$

$$= \int (\sin^2 x - \sin^4 x) \sin x \, dx$$

$$= \int \{(1 - t^2) - (1 - t^2)^2\}(-1) \, dt \quad (\cos x = t)$$

$$= \int (t^4 - t^2) \, dt$$

$$= \frac{\cos^5 x}{5} - \frac{\cos^3 x}{3} + C$$

である

p239: 3-(ix)

$$\sqrt[6]{x} = t$$
 とおくと、 $x = t^6$ であるから、 $\frac{dx}{dt} = 6t^5$ である。これらを用いると、
$$\int \frac{1}{\sqrt{x} - \sqrt[3]{x}} \, dx = \int \frac{1}{t^3 - t^2} \cdot 6t^5 \, dt$$
$$= \int \frac{6t^3}{t - 1} \, dt$$
$$= \int \frac{(t - 1)(6t^2 + 6t + 1) + 6}{t - 1} \, dt$$
$$= \int \left(6t^2 + 6t + 6 + \frac{6}{t - 1}\right) \, dt$$
$$= 2\sqrt{x} + 3\sqrt[3]{x} + 6\sqrt[6]{x} + 6\log\left|\sqrt[6]{x} - 1\right| + C$$

p239-240: 4-(i)

$$\frac{1}{n+1} + \frac{1}{n+2} + \dots + \frac{1}{2n} = \sum_{k=1}^{n} \frac{1}{n+k}$$

$$= \frac{1}{n} \sum_{k=1}^{n} \frac{1}{1+k/n}$$
 రెస్ట్ స్ట్రీ,

であるから、
$$\lim_{n \to \infty} a_n = \lim_{n \to \infty} \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \frac{1}{1+k/n}$$
$$= \int_0^1 \frac{1}{1+x} dx$$
$$= \left[\log(1+x) \right]_0^1 = \log 2$$

p239-240: 4-(ii)

$$\frac{1}{\sqrt{n^2 + n}} + \frac{1}{\sqrt{n^2 + 2n}} + \dots + \frac{1}{\sqrt{n^2 + n^2}} = \sum_{k=1}^n \frac{1}{\sqrt{n^2 + kn}}$$
$$= \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \frac{1}{\sqrt{1 + k/n}}$$

$$\lim_{n \to \infty} a_n = \lim_{n \to \infty} \frac{1}{n} \sum_{k=1}^n \frac{1}{\sqrt{1+k/n}}$$

$$= \int_0^1 \frac{1}{\sqrt{1+x}} dx$$

$$= \int_1^{\sqrt{2}} \frac{1}{t} \cdot 2t dt$$

$$= \left[2t\right]_1^{\sqrt{2}} = 2(\sqrt{2} - 1)$$

p247: 1-(i)

計算すると,

$$\int \frac{1}{x^3 - x} \, dx = \frac{1}{2} \int \left\{ \frac{-(x - 1) + (x + 1)}{(x - 1)x(x + 1)} \right\} dx$$

$$= \frac{1}{2} \int \left\{ -\frac{1}{(x + 1)x} + \frac{1}{x(x - 1)} \right\} dx$$

$$= \frac{1}{2} \int \left\{ \frac{-(x + 1) + x}{(x + 1)x} + \frac{x - (x - 1)}{x(x - 1)} \right\} dx$$

$$= \frac{1}{2} \int \left(-\frac{2}{x} + \frac{1}{x + 1} + \frac{1}{x - 1} \right) dx$$

$$= -\log|x| + \frac{1}{2} \log|x^2 - 1| + C$$

p247: 1-(ii)

$$(x-1)(x-2)(x-3) = x^3 - 6x^2 + 11x - 6$$
 ో దే సేస్ స్ట్రేస్ $\int \frac{x^3}{(x-1)(x-2)(x-3)} dx = \int \left(1 + \frac{6x^2 - 11x + 6}{(x-1)(x-2)(x-3)}\right) dx$

$$\frac{6x^2 - 11x + 6}{(x-1)(x-2)(x-3)} = \frac{A}{(x-1)} + \frac{B}{(x-2)} + \frac{C}{(x-3)}$$

$$6x^{2} - 11x + 6 = A(x - 2)(x - 3) + B(x - 1)(x - 3) + C(x - 1)(x - 2)$$

$$\therefore A = \frac{1}{2}, \quad B = -\frac{1}{8}, \quad C = \frac{27}{2}$$

$$\int \frac{(x-1)(x-2)(x-3)}{(x-1)(x-2)(x-3)} \, dx = \int \left(1 + \frac{1}{(x-1)(x-2)(x-3)}\right) \, dx$$
 である。ここで、 A, B, C を定数として、
$$\frac{6x^2 - 11x + 6}{(x-1)(x-2)(x-3)} = \frac{A}{(x-1)} + \frac{B}{(x-2)} + \frac{C}{(x-3)}$$
 とおく。これより、
$$6x^2 - 11x + 6 = A(x-2)(x-3) + B(x-1)(x-3) + C(x-1)(x-2)$$
 ∴ $A = \frac{1}{2}$, $B = -\frac{1}{8}$, $C = \frac{27}{2}$ となる。これより、
$$\int \frac{x^3}{(x-1)(x-2)(x-3)} \, dx = \int \left\{1 + \frac{1}{2(x-1)} - \frac{1}{8(x-2)} + \frac{27}{2(x-3)}\right\} \, dx$$

$$= x + \frac{1}{2} \log \left|\frac{(x-1)(x-3)^{27}}{(x-2)^{16}}\right| + C$$

p247: 1-(iii)

$$\frac{x^3+1}{x(x-1)^3} = \frac{A}{x} + \frac{B}{x-1} + \frac{C}{(x-1)^2} + \frac{D}{(x-1)^3}$$

$$\frac{x^3+1}{x(x-1)^3}=\frac{A}{x}+\frac{B}{x-1}+\frac{C}{(x-1)^2}+\frac{D}{(x-1)^3}$$
 とおくと、簡単な計算により、 $A=-1,\ B=2,\ C=1,\ D=2$ とわかるので、
$$\int \frac{x^3+1}{x(x-1)^3}\,dx=\int \left(-\frac{1}{x}+\frac{2}{x-1}+\frac{1}{(x-1)^2}+\frac{2}{(x-1)^3}\right)\,dx$$

$$=\log|\frac{(x-1)^2}{x}|-\frac{1}{(x-1)}-\frac{1}{(x-1)^2}+C$$

p247 : 1-(v)

$$\int \frac{1}{a+b\cos x} \, dx = \begin{cases} \frac{1}{a}\tan\frac{x}{2} + C & (a=b\neq 0 \text{ のとき}) \\ -\frac{1}{a\tan\frac{x}{2}} + C & (a=-b\neq 0 \text{ のとき}) \end{cases}$$

p247: 1-(viii)

$$an x = t$$
 とおくと, $rac{dt}{dx} = rac{1}{\cos^2 x}$ であるから,求める不定積分は,
$$\int rac{1/\cos^2 x}{a^2 + b^2 an^2 x} \, dx = \int rac{1}{a^2 + b^2 t^2} \, dt$$

$$= rac{1}{ab} \arctan\left(rac{b}{a} \tan x\right) + C$$

p247: 1-(xiii)

$$x+\frac{1}{x}=t$$
 とおくと、 $\frac{dt}{dx}=1-\frac{1}{x^2}$ であり、求める不定積分は、
$$\int \frac{1-x^2}{1+x^2\sqrt{1+x^4}}\,dx=\int \frac{1-x^2}{x^2(x+1/x)\sqrt{x^2+1/x^2}}\,dx$$
$$=\int \frac{1}{t\sqrt{t^2-2}}\,dt$$
 となる。ここで、 $s=\frac{1}{t}$ とすると、 $\frac{dt}{ds}=-\frac{1}{s^2}$ であり、
$$\int \frac{1}{t\sqrt{t^2-2}}\,dt=\int \frac{1}{\sqrt{1-2s^2}}\,ds$$
$$=\frac{1}{\sqrt{2}}\arcsin\left(\sqrt{2}s\right)+C$$
$$=\frac{1}{\sqrt{2}}\arcsin\left(\frac{\sqrt{2}x}{x^2+1}\right)+C$$

$$x = \frac{1}{t} \ \, \xi \, \sharp \, \zeta \, \, \xi \, , \ \, \frac{dx}{dt} = -\frac{1}{t^2} \ \, \mathfrak{T} \, \sharp \, \xi \, , \ \, x^2 + 1 = \frac{1}{t^2} + 1 \ \, \xi \, \sharp \, \xi \, . \ \, \, \sharp \, \tau \, ,$$

$$\int \frac{1}{x\sqrt{x^2 + 1}} \, dx = \int \frac{t}{\sqrt{1/t^2 + 1}} \cdot (-1/t^2) \, dt$$

$$= -\int \frac{1}{\sqrt{t^2 + 1}} \, dt$$

$$= \log \left| t + \sqrt{t^2 + 1} \right| + C$$

$$= \log \left| \frac{1 + \sqrt{x^2 + 1}}{x} \right| + C$$

$$\int \frac{1}{\sqrt{(x-a)(b-x)}} dx = \int \frac{1}{\sqrt{\left(\frac{b-a}{2}\right)^2 - \left(x - \frac{a+b}{2}\right)^2}}$$
$$= \arcsin\left(\frac{2x - a - b}{b - a}\right) + C$$

第5章:級数

p366: 1-(i)

$$\lim_{m \to \infty} a_{2m} = 1, \quad \lim_{m \to \infty} a_{2m-1} = -1$$

であり, $(a_n)_{n\in\mathbb{N}}$ の集積値全体の集合は $\{-1,1\}$ である. ゆえに、 $\overline{\lim}_{n\to\infty} a_n = 1, \quad \underline{\lim}_{n\to\infty} a_n = -1$

$$\overline{\lim}_{n \to \infty} a_n = 1, \quad \underline{\lim}_{n \to \infty} a_n = -1$$

p366: 1-(ii)

$$\lim_{m \to \infty} a_{2m} = \infty, \quad \lim_{m \to \infty} a_{2m-1} = -\infty$$

であり、 $(a_n)_{n\in\mathbb{N}}$ の集積値全体の集合は $\{-\infty,\infty\}$ である $^{\dagger 1}$.

$$\overline{\lim}_{n \to \infty} a_n = \infty, \quad \underline{\lim}_{n \to \infty} a_n = -\infty$$

p366: 1-(iii)

 $(a_n)_{n\in\mathbb{N}}$ の集積値全体の集合は $\{-\frac{\sqrt{3}}{2},\frac{\sqrt{3}}{2}\}$ である。 ゆえに, $\varlimsup_{n\to\infty}a_n=\frac{\sqrt{3}}{2},\quad \varliminf_{n\to\infty}a_n=-\frac{\sqrt{3}}{2}$

$$\overline{\lim}_{n \to \infty} a_n = \frac{\sqrt{3}}{2}, \quad \underline{\lim}_{n \to \infty} a_n = -\frac{\sqrt{3}}{2}$$

である.

参考文献

[1] 杉浦光夫『解析入門 I」, 東京大学出版会, 1980